

美食の白兎

ドラ民具

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気まぐれで書いたものです、連載するかは分かりません。

ログインしてなくても感想を掛けるように設定を変更しました。

目次

美食の白兔	2
一龍会長からの依頼	6
追憶	11
迷宮都市オラリオ	17
〔ヘステイア・ファミリア〕	20
ダンジョン	26
〔ロキ・ファミリア〕	32
事実	40
帰還	48
後の祭り	56
予測	60
実験	63

美食の白兔

ここはグルメ界・エリア2、八王の一角である狼王ギネスの支配するエリアに一人の少年が居た。

白髪深紅眼のまるで兔を彷彿とさせるその少年の目の前に一匹の猛獣が居た。

「グオオオオオオオオオッ！」

その猛獣の名は王陸鮫、捕獲レベル4450の魚王類で八王にも襲い掛かる凶暴性を持つ。

そんな危険な猛獣の前に居るというのに少年は口からよだれを垂らしながらこう言った。

「いただきます」

その言葉と共に手を合わせると同時に王陸鮫が飛び掛かって来る。

【猿武 砕骨】

それに対して少年は反撃として拳を王陸鮫の鼻へと叩き込んだ。

すると、王陸鮫の身体からバキボキと何か硬い物の音が聞こえてきた。

その音の正体は王陸鮫の骨が砕ける音だった。

何と、少年はたった一撃の拳で捕獲レベル4000代の猛獣の骨を砕いてしまった。骨を砕かれた王陸鮫は動く事が出来ず何も出来ないのだ。

「僕の血肉になつてくれる事を感謝するよ、王陸鮫。」

少年のその言葉を最後に王陸鮫はその生涯に終わりを迎えるのだった。

モグモグと少年は王陸鮫の肉を口の中へと詰め込み咀嚼をし、飲み込む。

「やっぱりおいしいな、王陸鮫の肉は。」

少年はけた外れの實力からはかけ離れた年相応の笑みを浮かべながら食事を続けていく。

見る見るうちに王陸鮫の肉は少年の胃袋の中に消費されていき、最終的には骨しか残らなかつた。

「ふうく、ごちそうさまでした。」

そう言つて手を合わせる少年は立ち上がつてこう言つた。

「それじゃあ次はデザートだな。」

そう言つて少年は口笛を吹くと、空から現れたのは二対四枚の翼を持つ巨大な黒い竜。

「ゴアアアアアアアアッ!!」

その竜の名はブラガドラゴン、翼竜獣類で認められた者にしか従う事は無い誇り高き存

在。

そんなブラガドラゴンを従える少年は頭の上に乗るとこう言った。

「それじゃあ、一度行こうかヴァロド。癒しの国・ライフへ」

「ゴアー！」

少年の言葉を理解しているかのように相槌を打つヴァロドと呼ばれるブラガドラゴンは空へ舞い上がり、癒しの国へと向かうのだった。

少年の名前はベル・クラネル、本来は英雄になる為、出会いを求めて冒険者となる。

だが、この世界でのベル・クラネルはひよんな事からグルメ界へと迷い込み、美食屋となった。

しかし、それだけでは終わらないのが世の常。

これから始まるのは美食と冒険の交わる白兎の物語である。

ベル・クラネル

【フルコース】

前菜：???

スープ：???

ド	デ	サ	主	肉	魚
リ	ザ	ラ	菜	料	料
ン	ー	ダ	：	理	理
ク	ト	：	???	：	：
：	：	???		???	???
：	：				
???	???				

一龍会長からの依頼

癒しの国・ライフ

そこは自然の癒しを求めて世界中から重症患者や病気の者が訪れ集まる文字通りの癒しの国である。

健康や美容に良い食材もある為、美容目的で訪れる者もいるそんな国に一匹の黒竜が降り立つ。

ブラガドラゴンのヴァロド、僕ベル・クラネルのパートナーアニマルである。

「それじゃあ、行って来るから大人しくしてね。」

「ゴア」

僕の言葉に返事をしてグルメ界から人間界まで飛んできて疲れたのかヴァロドは眠りについた。

「よし、デザートデザート!!」

そう言いながら僕は癒しの国の中へへと入っていくのだった。

療樹マザーウッド、別名『食の宿屋』とも呼ばれる国のシンボルであり百人以上の再

生屋が宿を構える癒しの空間。

その空間の一室「与作」という看板が掲げられた部屋の中で一人の大男が葉巻樹を吸いながらこう言った。

「ありやあ、ブラガドラゴンじゃねえか。とすると、ベルの奴が来やがったな。」

そう言っている大男の名は与作、「赤い再生屋」とも「血塗れの与作」と呼ばれる再生屋。

「ここに來るとは丁度良い。会長からの呼び出しを伝えるためにグルメ界まで行かずに済んだぜ。」

そう言つて与作は自身の作業部屋から出て、件の少年のもとへ向かうのだった。

パクパクパク、ムシヤムシヤゴックン

「おいしいく、ホワイトアップルのコンポート!!」

そう言いながら僕は三十人前のコンポートとクラッカーを食べていると前の席に座つて来る人物と顔を合わせる。

「よお、久しぶりだなベル!」

「そうですね、お久しぶりです与作さん。」

そうやって挨拶を済ませると、与作さんがこう言つて来る。

「相変わらず人間界とグルメ界を行き来してんのか？」

「はい、さつきもグルメ界から帰つて来た所です。」

「そうか」

この二人は何気なく会話をしているが、内容は周りからすれば異常だ。聞かれているのであればだが。

「それで僕に何か用事でもあるんですか？」

「おう、一龍会長がお前の事を呼んでたぞ。」

与作さんを言葉を聞いて僕はこう言つた。

「えっ、会長が・・・何の用なんですか？」

「さあな、そこまでは俺も聞かされちやいねえ。」

「そうですか。」

会長からの呼び出しが、またどこかの調査なのかな。

そう思いながら追加で注文してあつたホワイトアップルのコンポート三十人前を平らげるとヴァロドに乗つて僕はIGO本部へと向かうのだった。

I G O、国際グルメ機関

主な役割は新たなグルメ食材の発見、その研究と開発、食の流通と治安維持で、全世界で数万人を超える職員が世界全土で働いている。

もともとは国際連合の一専門機関だったが、グルメ食材の需要に伴って主要機関となり、今では巨大な国際機関として独立し、現在の加盟国は360ヶ国であり国際連合の加盟国数をも大きく上回っている。

「一龍会長、ベル・クラネル氏がお見えになりました。」

「おお、来たか。」

職員の報告にI G O会長・一龍がそう言いながら湯飲みにお茶を入れる。

「こんにちは、一龍会長今日は何の用ですか？」

僕がそう言いながらやって来ると、一龍会長はこう言ってくる。

「うむ、まあそう急くな。茶でも飲んでゆっくりするといい。」

そう言われて僕はソファアに座って出されたお茶を一口飲む。

「オゾン茶ですか、相変わらざるの苦さですけど美味しいですね。」

「わっはっは、そうだろう。極楽米で作られたせんべいもあるぞい。」

「いただきます！」

そうして、僕と一龍会長は一時間程雑談した後本題に入る事にした。

「実はのう、ベルお主にやってもらいたい仕事があつてのう。」

「何ですか、わざわざ僕を与作さんに呼びに越させようとするぐらいの依頼つて。」

僕がそう言つて質問をすると、一龍会長はこう言つて来る。

「うむ、実はアイスヘル近海で正体不明の亀裂が発生したんじや。」

「亀裂ですか？」

「うむ。その亀裂はを調査しようにも怪鳥などが飛んでおつてヘリでは近づけんからのう。グルメ界の猛獣であるブラガドラゴンをパートナーアニマルにしておるお主に任せたいんじや。」

そう言つて来る会長に僕はこう言つた。

「分かりました、今から行つてきますね。」

「そうか、すまん。」

「気にしないでください、一龍会長には返しきれない程の恩がありますから僕が出来る事であれば力になりたいですから。それじゃあ行つてきます!!」

僕はそう言つてヴァロドに乗つて目的の場所であるアイスヘル近海へと向かうのだった。

追憶

一龍会長から正体不明の亀裂の調査依頼を受けた僕はヴァロドに乗ってアイスヘルへと向かっている。

モグモグ、ゴックリ。

「セレ豚のカツサンド、美味しい!!」

そう言いながら空の旅を楽しんでいると、目的地である正体不明の亀裂が見えて来る。

「あれが、一龍会長の言っていた亀裂か……。」ズズー。

会長から分けて貰ったオゾン茶を飲みながらそう言っていると、亀裂が広がって穴が現れた。

その穴からは白い光が放たれ、僕はその光をまともに受けてしまった。

「不味い、いったんここから離れようヴァロド!!」

僕の指示を受けてヴァロドはその光から離れる、ヴァロドは。

「えっ、どういう事!?!」

その光を浴びたのはヴァロドも同じなのに、僕だけがその光に囚われていた。

「か、身体が動かない!？」

奇怪な出来事に戸惑いを隠せずにいると、穴の方にへと吸い込まれていく。

「ゴアアアア!」

「来るな、ヴァロド!!」

それを見たヴァロドが僕の事を助けようと近付いて来るが僕はそれを止める。

ヴァロドの事を制止させる為に意識を割いていた間に僕の身体は穴の中にへと引き込まれていき、最後には意識を失ったのだった。

ベルが依頼を遂行するためにアイスヘルへと向かった後、IGO本部では一龍がベルとの初めての出会いを思い出していた。

「ベルと初めて会ったのはグルメ界のエリア7じゃったな。」

グルメ界、人間界とは環境もそこに住む猛獣の捕獲レベルも一線を画す。

そのグルメ界は主要の大陸が料理の正餐フルコースと同じで八つ存在している。

その中で一龍がベルと出会ったエリア7は『山の大陸』と呼ばれており、そのエリアには五十億頭もの猿が跋扈しており『モンキーレストラン』とも呼ばれている。

「しかも驚いた事に八王の中でも問題児とされる猿王に育てられているとはのう。」

八王、グルメ界の八つの大陸を支配する八体の獣の王の事を指す言葉である。

八王の中でも問題児とされているのがエリア7の八王・猿王バンビーナ。

種族名はキンタマントヒヒと呼ばれるふざけた名前の猿だが、王と称されるだけの實力を持つ。

猿武と呼ばれる武術の開祖であり、大陸に住む全ての猿に伝承させている。

その理由は純粹に恋猿こいびとや他の王達以外の遊び相手が欲しかったからなんじゃが・・・

まあ、そのせいで馬鹿ルールげた規則を作った猿達が現れたんじゃがな・・・

それにその事については猿王の奴は無関心じゃったがな・・・

話を戻すが、その猿達は猿王を頂点とする猿武の實力による序列付けがされておる。

その猿武の頂点であり八王の一角でもある猿王バンビーナが自分の懐に三歳の子供を抱えながらニトロ口を食わせていたからのう。

しかも、わざわざ100Gマウンテンの麓にある産声の樹まで降りて来てな・・・

ワシはあの時自分の目を疑ったほどじゃ、無邪気で自由奔放な性格の猿王がまるで親の様に子供をあやす姿を想像出来るじやろうか？

いや、猿王を知る者であればそれは無いと否定するじやろうな。

現にワシもこの自分の目で見えるまでは信じられなかったからのう。

じゃが、ワシはすぐに猿王があやしておった子供の才能に驚かされた。

何故なら、三歳という若さともい幼さで猿武を会得しているのじゃからな。

子供の異常なまでの成長速度いや学習能力に舌を巻いた。

すると、猿王がワシの存在に気づくとその子供を置いて100Gマウンテンに戻って行ってしまう。

子育てに飽きたのか、それともワシに子供を託してくれたのかそれは猿王にしか解らん事じゃ。

とにかく、ワシはその子供を人間界に連れ帰り、人間としての常識や礼儀作法などを学ばせ、美食屋としての知識なども叩き込んだ。

名前の方は服に刺繍が施されておったから助かったわい。

それにワシの他にも次郎の奴も自分のノッキング技術を叩き込んでおったな。

実力も猿王から猿武を仕込まれておったから問題は無かったが、無駄を消し去る為に食林寺の食義と食没を習得させる。

そして、グルメ界の環境に適應する為の修行も見事達成してみせた。

三途の道の幾万もの実戦経験を経て、直観も身に付けおった。

今ではグルメ界を歩き来するまでに成長した、育ての親の一人としては嬉しい限りじゃ。

しかし、一つ腑に落ちん事がある。

それは何故ベルがグルメ界にいたのか……。

何者かに連れられてというのは考えにくい。

だとすれば、何か別の力が動いとったのかもしれない。

……不穏な空気を感ずるのう。

美食會の動きも活発化してきておるからな、今まで以上にトリコ達四天王の力も必要となってくるじやろうな。

そう考えておると、上空からベルのパートナーアニマルであるブラガドラゴンのヴァロドが飛んできた。

しかし、頭の上にはベルはおらんかった。

「ヴァロドよ、ベルはどうしたんじや？」

ワシがそう問いかけると、ヴァロドの奴は悲しそうな表情を見せる。

「まさか、ベルに何かあったのか!？」

「……」コクリ

ワシの言葉に同意するように頷いて見せるヴァロド。

ヴァロドのそんな様子を見て、空を見上げてこう言った。

「無事でいてくれ、ベル。」

ワシはその願いが届く事を願うしかなかった。

迷宮都市オラリオ

懐かしい、最初に草の匂いを嗅いだ時何故かそう思った。

何故そう思ったのかは分からない、でも酷く懐かしい感覚が心に沁み渡ってきた。

眼を開けば、僕は森の中にいた。

「ここはどこだろう、僕は確か一龍会長の依頼で亀裂の調査に……。」

寝転がったまま記憶を呼び起こしていると、向こうの草むらからガサリという物音が聞こえ僕は飛び起きて臨戦態勢に入る。

「猛獣かな。でも、獣臭にしては変わった匂いだな」

そう言いながら待ち構えていると、草むらから出てきたのは全長5M程ある紅色の肉食恐竜の様な猛獣だった。

「へえ、初めて見る猛獣だな。どんな味がするのか楽しみだ。」

そう言った後、僕は舌なめずりながら戦闘態勢に入る。

猛獣が大口を開けて噛みついて来るのに対して、僕は半歩下がって躲した後鼻先に向かって鼻先を殴ったその瞬間、衝撃でその猛獣は灰と化して一つまみ程度の小石を残さず消え去ってしまった。

「……え？」

あまりの出来事に僕は呆然としてしまった、まさか食材が消えてしまうとは思わなかったからだ。

「もしかして、特殊調理食材だったのかな？」

そんな事を考えていてもしようがない為、まずはこの森を抜ける事にした僕は光の強い方向へと向かって走り出した。

案外すぐに森を抜ける事が出来た僕の目に入ってきたのは堅牢かつ巨大な城壁のような壁に囲われた都市だった。

「良かった、思ったより近くに街があつて。」

そう言いながら僕は走つてその街にへと近付いて行く。

すると、僕の目に驚きの光景が飛び込んできた。

理由は街に入る為に並んでいる一部の人達に動物の耳や尻尾が生えていたからだ。

それでも驚きはしてもあまり動揺していない自分が居た為、平静を装う事が出来た。

そうしている内に検問を受け、僕は街の中にへと入った。

検問を受ける間、担当してくれた男性からいろいろと聞ける事は聞いておいた。

この都市の名は迷宮都市オラリオ、夢に名声などを求めて冒険者が集う都市であること。

冒険者は派閥ファミリアというものに属し、その派閥ファミリアの主神ファールナに神の恩恵を授かり、ダンジョン攻略を目指すというものらしい。

これではつきりした事がある、それはあの亀裂の中に吸い込まれた僕は今までの常識が通用しない『異世界』に迷い込んでしまったという事だ。

でも、始めて聞く言葉なはずなのにどこかで聞いた事があるような気がするのは気のせいだろうか。

そう思いながらもダンジョンを探索する為、僕の事を入れて貰える派閥ファミリアを探す事にした。

だが、この時僕はまだ知らなかった。

僕以外にも異世界にへと渡って来ている存在がいるという事に。

【ヘステイア・ファミリア】

僕は三時間も派閥^{ファミリア}入団の為に訪問するも、見た目で判断されて入団は叶わなかった。

「うーん、どうしよう」

そうやって歩きながら考えていると、後ろから声を掛けられた。

「へい、そのヒューマンの少年そんなに考え込んでどうしたんだい？」

そうやって来たのは、黒髪ツインテールの少女かと思つたが普通の人間とは気配が違つた。

僕は目の前に居る少女に対してアタリを付けてこう口にした。

「もしかして、女神様ですか？」

それを聞いた少女は笑顔でこう言つて来る。

「そうだよ、ボクは慈愛の女神ヘステイアさ」

そう言いながら顔に似合わない胸を張り、そう言つて来る。

神である事を知つた僕はヘステイア様にこう言つた。

「僕はベル・クラネルと言います。貴女の派閥^{ファミリア}に入れて頂けませんか？」

僕がそう言うと、ヘステイア様は満面の笑みを浮かべながらこう言つて来る。

「もちろんだぜ、ベル君!!」

こうして、僕は「ヘステイア・ファミリア」の唯一の団員となった。

場所は変わり、とある書店。

その店内には老齡のヒューマンが一人いた。

「おや、ヘステイアちゃん。今日はどうかしたのかい?」

「ちよつとね!!おじいさん、二階の書庫を貸してくれよ!!」

「おうおう、構わんよ。本読んだら元の棚に戻しておいてね」

二階の書庫に入ると、古い本の香りが漂い満ちていた。

それが何故か、懐かしく思えた僕は顔を緩ませる。

「それじゃあ、ベル君早速神の恩恵フアルナを刻むから上着を脱いでくれ」

「分かりました」

そう言われて上着を脱ぐと、ヘステイア様は慌てた様子でこう言ってくる。

「ベル君、何だいその身体中の傷は!?!」

そう、僕の肉体からだに刻まれている傷の事だ。

左胸に抉られたような傷と肩や腹に腕などに無数にある切り傷に対してそう言うて来る。

「ああ、これは猛獣と戦った時に付いたんですよ」

「猛獣?! いや、むしろモンスターにやられたって言われた方が信じられるけど!」

僕が傷の事に対して答えると、ヘステイア様はそう言い返して来る。

「でも、ベル君の言葉には嘘はないから信じるよ」

そう、神は下界の人間こどもの嘘を見抜く。

隠し事は神同士にしか通用しない。

「それじゃあ、改めて神フエールナの恩恵を刻むよベル君!!」

「はい、ヘステイア様!!」

ヘステイア様の言葉に僕は同意して、本当の意味で「ヘステイア・ファミリア」の団員となった。

しかし、騒動はこれで終わりでは無かった。

「……な、何だい、この【ステイタス】は?」

「どうかしましたか、ヘステイア様?」

作業が終わったのか、いきなり叫び出したヘステイア様に僕が問いかける。

すると、ヘステイア様は用意してあった羊皮紙に「ステイタス」を共通語コイネで翻訳して

写してからこう言ってくる。

「ベル君、自分の【ステイタス】を自分の目で確認するんだ」

そう言つて差し出される羊皮紙を受け取り、「ステイタス」を確認するとそこに書かれていたのは……。

ベル・クラネル

捕獲レベル5980

力SSSS9627 耐久SSSS6996 器用SSSS9527 敏捷SSSS103

90 魔力10

狩人SSSS 耐異常SSSS 拳打SSSS 破碎SSSS 美食SSSS 進化SSSS

直観SSSS 食義SSSS 食没SSSS 幸運SSSS

潜水SSSS

【美食世界を行き交う者】

- ・ 美食世界に自由に行ける
- ・ 食材を持つてこれる

【グルメ細胞】

- ・ 常時全アビリテイ超高補正
- ・ 食べ物を食べた時、全アビリテイ超高補正

・適合食材を食した際、細胞が進化する。

【グルメ細胞の悪魔】

・力、耐久、器用、敏捷のアビリティ常時超高補正

【猿^{モンキーダンス}武】

・細胞の意思統一による全アビリティ常時超高補正

これを見た僕はこう思った。

「これ、どういう意味なんですかねヘスティア様」

ズッコッ!!

僕の一言を聞いてヘスティア様はズッコケた。

「ベル君、君はこのスティタスを見て何とも思わないのかい!？」

「はい、なんとも!!」

ハッキリとそう伝えると、ヘスティア様はこう言ってくる。

「いいかい、『スティタス』は基本0から始まるのに対してベル君は規格外な状態だという事さ」

そう言われて僕は再度羊皮紙を見ると、捕獲レベルが5980となっている事に気づいた。

「5980つて猿王バンビーナとは20も下ですな」

僕がそう言うのと、ヘステイア様がこう言つて来る。

「そういう問題じゃないんだよ、ベル君!!というか、バンビーナつて言うのは誰なんだい!?もしかして、故郷に残してきた嫁的な存在かい!?’」

初めて出来た眷属こどもに生涯の伴侶が居るのではないかと焦るヘステイア。

しかし、それに対して僕は落ち着かせるようにこう言つた。

「落ち着いてくださいよ、ヘステイア様。バンビーナは猿で育ての親ですよ」

「さ、る……、猿つて動物のかい?’」

「はい」

「一体、どういう事なんだ~~~~~!?」

結果、余計に混乱することとなつたヘステイアだつた。

ダンジョン

あの後、何とかヘステイア様を落ち着かせる事が出来た僕は上着を着直して今僕達「ヘステイア・ファミリア」の本拠ホームにへと向かっている。

「あれ以上はお爺さんに迷惑がかかるから移動するけど、話はまだ終わっていないからねベル君。」

「はい、分かっていますよヘステイア様。」

話しながら歩いて着いた場所は廃教会だった。

「ヘステイア様、ここが僕達の本拠ホームですか？」

「そうだよ、ごめんねベル君。本拠ホームがこんなオンボロで。」

しよげながらそう言つて来るヘステイア様に対して僕はこう言った。

「別に気にしませんよ、僕は狩りに出る時はいつも野宿でしたし。」

「うん、流石に野宿よりはましだと思っただね・・・。」

そう言いながら僕とヘステイア様は廃教会の中に入り、更にもその中にある隠し扉を通つて部屋へと入る。

その部屋には最低限の家具と生活に必要なものが置かれていた。

「それにここからのし上がって行けば良いですから頑張りますよ、ヘステイア様。」
「ベル君、そうだね。これから頑張っていけばいいんだ!!」

僕の言葉を聞いてヘステイア様は拳を突き上げながらそう言うのだった。

「それで、話は戻るだけだね。ベル君、このスキルとかに何か思い当たる事は無いかい？」

ヘステイア様はそう言いながら僕の「ステイタス」の羊皮紙を見ながらそう言って来るのに対して僕は自分なりの考えと今までの自分を話す事にした。

猿王バンビーナに育てられた事や一龍会長達に常識や礼儀作法を教えて貰った事などを全て話した。

「つまり、ベル君はその美食の世界に現れた亀裂からこの世界へと渡って来たって訳なんだね。」

「はい、そうです。」

僕の話全てを聞いたヘステイア様はこう言ってくる。

「まあ、異世界に渡った存在がボクの眷属こどもになつてくれるという未知には驚いたけど君がボクの大切な眷属こどもには変わりないんだからね。」

「ありがとうございます、ヘステイア様。」

そう言ってくれるヘステイア様に感謝の言葉と共に頭を下げる。

すぐに頭を上げるように言われたが、やはりありのままの自分を受け入れてくれた事が嬉しくて顔がにやけるのが止める事が出来ない為顔を上げる事が出来ない。

すると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「そうだった、ベル君今からギルドに行つて来てくれるかい？」

「ギルドにですか、何か用でもあるんですか？」

ヘステイア様の言葉に反応して顔を上げると、更に言葉を続けて来る。

「君の冒険者登録をしないといけないからね。」

「そうですか、分かりました。今から行つてきます。」

そう言つて僕は本拠^{ホーム}を出て、ギルドにへと向かうのだった。

ギルドに着くと、そこには沢山の色々な種族の人が集つていた。

「凄いな、まるで美食屋の仲介所みたいだな。」

そんな事を言いながら受付に付くと一人の女性職員に話しかける。

「すみません、冒険者登録をしたいんですけど。」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください。」

そう言つて女性職員の人は書類を仕分け終えてすぐに僕の所にやつて来た。

「ようこそ迷宮都市オラリオへ！冒険者登録ということですのでこの書類にお名前と所属派閥ファミリーを記入してください。」

そう言われて僕は目の前に出された書類に名前と所属派閥ファミリーを記入して女性職員の人に手渡した。

すると、女性職員の人はこう言つて来る。

「ベル・クラネル氏、所属は「ヘステイア・ファミリー」ですね。」

「はい、そうです。」

僕がそれに対して同意すると、女性職員の人はこう言つて来る。

「それでは、こちらで新人冒険者のダンジョンにおける講義が行われているので受講してください。」

「あつ、はい分かりました。」

これはありがたい、美食屋としての経験は十分に積んでるけど冒険者としてまだまだ半人前だからこうやつて知識を得れる事は嬉しい。

講義を受講して三時間が過ぎ、講義は終わって僕は座りっぱなしでなまった身体を解していると受付とダンジョンの講義をしてくれたエイナ・チュールという女性職員が近づいてきた。

「ベル君は偉いね、大体の人は講義を拒否する人が多いのに。」

先ほどとは打って変わって中々に友好的フレンドリーに接してくるエイナさんにこう言った。

「はい、何事にも情報はたくさん持っていた方がいいと教えられていますから。」

「うんうん、情報は大事だよ。自分を危険から守らなくちゃいけないし。」

僕の言葉を聞いてエイナさんは満足そうに頷き、更に言葉を続けて来る。

「そうだった、本日付で私エイナ・チュールが君の専属アドバイザーに付く事になったの。これからよろしくね、ベル君。」

「はい、よろしくお願ひしますエイナさん。」

互いにそう言うてから握手を交わした後、僕は新人冒険者用の装備を借りて試しにダンジョンに潜る事にした。

ダンジョンの一階層にやって来た僕が最初に思った事は……。

「思ったほど危険じゃないな。」

これならグルメ界の方がよっぽど危険だなと思ひながらゴブリンを蹴り殺し、魔石とドロツプアイテムゴブリンの小牙を袋に回収する。

そのまま探索を続けて行き、十二階層まで降りてきた僕はパンパンに膨れ上がった袋を見て地上へ戻ろうとした時、十三階層へと繋がる通路から強い獣臭がした。

「この獣臭さはモンスターじゃないって事は……、まさかグルメ界から猛獣が来たって

言うのか!？」

グルメ界の猛獣が来ている事に驚くも、僕は迷う事無く十三階層へと足を踏み入れた。

ダンジョンから生まれたモンスター達が襲って来るが、それを一蹴して猛獣のいる場所に直行するのだった。

【ロキ・ファミリア】

獣臭を頼りに僕は十三・十四・十五・十六階層を走破し、十七階層へ辿り着いた。

「間違いない、この階層に居る！」

臭いの強さが今までより濃い事からグルメ界の猛獣が十七階層に居ると判断した。

「急がないと!!」

そう言つて十七階層を進んでいると牛頭のモンスターの大群が襲つて来る。

「邪魔だ!!」

【猿武 崩巖^{ほうがん}】

拳をモンスターに叩き込むと、衝撃とその余波でその大群は魔石とドロツプアイテム^{ミノタウロスの角}

へと変わった。

が、今はそれに見向きもせず僕は猛獣のいる場所で進んでいく。

すると、十七階層最奥の大広間でその猛獣はいた。

「グギユアアアアアアアッ!!」

けたたましい鳴き声を上げているのは無数に腕が生えており、3つの目は顔面から突

出し、ライオンのような鬣を持つているなんとも不気味な姿の巨大な蛇。

名前はデビル大蛇、目の前にいる奴は捕獲レベル21の猛獣だが原種であるデビル大蛇の捕獲レベルは5100。

しかも、大広間にはそのデビル大蛇と戦っている一団が居た。

その一団が掲げている旗には滑稽な笑みを浮かべる道化師トリックスターの紋章が刻まれている。エンブレム

確か、エイナさんが教えてくれた迷宮都市オラリオの最大派閥の一角である「ロキ・ファミリア」だったかな。

しかし、その最大派閥の「ロキ・ファミリア」でもデビル大蛇を仕留め切れていない。何故なら、奴はその巨体に見合わず動きは極めて機敏で攻撃を全て躲しているからだ。というのもあるけど、当たったとしても、伸縮性のある皮膚を限界まで圧縮させて防いだり、傷を負わせる事が出来ても高い再生力ですぐに傷口を塞いでしまうからだ。

このままではいずれ限界が来る、そう感じた僕はわざと音を立てた。

「グギユアアアツ!!」

その音にデビル大蛇が反応し、僕の方にへと向かって来る。

「危ない!!」

【ロキ・ファミリア】の誰かがそう言ってくる声が聞こえてきたけど、何の問題も無い。

僕は人差し指を立てて、飛び掛かって来るデビル大蛇の腹に三か所打ち込んだ。

すると、デビル大蛇は地面へと倒れ込むともう起き上がる事は出来ない。

「ノックアウト完了」

僕はそう言った後、「ロキ・ファミリア」の人達の方を見ると唾然とした表情をしていた。

まあ、自分達が苦戦していたデビル大蛇をこうもあっさりと行動不能にされてしまつたらそうなるか。

そう考えていると、最初に我に戻つた狼^{ウエアウルフ}人の青年がこう言つて来る。

「おいテメエ、なに人の獲物の横取りをしてやがる!!」

「横取りなんてしてませんよ、僕はただ自分に降り掛かつて来た火の粉を払っただけだ。」

「なんだと、テメエ!!」

青年の言葉に対して僕は冷静にそう言うと、青年は声を荒げる。

「やめろ、ベート!!」

「止めんじやねえよ、フィン! コイツは俺らの獲物を横取りしやがったんだぞ!!」

「だが、あのまま戦闘が続いていれば犠牲者も大勢出ていた。」

「・・・チツ!!」

ベートと呼ばれた狼^{ウエアウルフ}人の青年は止めに入ったフィンと呼ばれる少年の言葉に反論し

たが、フィンと呼ばれる少年の正論に言葉を詰まらせて舌打ちをする。

何故だろうか、あのフィンと呼ばれる少年からは大人の風格を感じる。

ダンジョンに潜っていれば誰しもそうなるのかな、とそんな事を考えていると先ほどのフィンと呼ばれる少年が話しかけてくる。

「うちの団員が失礼したね、申し訳ない。」

「いえ、気にしないでください。僕もそう言う時がありますし、その気持ちはよく分かりますから。」

そう言つて僕は気持ちだけ受け取る事にした。

すると、フィンと呼ばれる少年の後ろから翡翠の髪と目をした妖精女性と立派な髭を蓄えた鉞人^{ドワーフ}の老兵がやつて来た。

「助けてくれた事、感謝する。」

「ガハハハハハッ、小僧中々に面白いな。」

妖精の女性は感謝の言葉を、鉞人の老兵は豪快に笑つていた。

「いえ、僕はそんな大した事はしてませんよ。」

その二人の言葉に対して僕はそう言っている、金髪金目の少女が話しかけてくる。

「ねえ、どうしたらそんなに強くなれるの？」

そう聞いてくる少女の眼には強くなるという何か執念染みたものを感じた。

すると、僕と話していた三人はまたかといった表情をしていた事から考えてこの人は

強くなる事にしか興味が無いのかと思つてしまった。

それに対して、僕はこう言つた。

「正直、それは僕にもよく分かりません。強くなる理由は人それぞれ違う、だからこそ安易には答える事は出来ません。」

「そつか、ありがとう。」

僕がそう言うのと、少女は少し落ち込んだ様子でそう言つて来る。

すると、少女の横から女戦士アマゾンネスの黒い短い髪の少女が顔を出して来た。

「ねえねえ、このモンスター倒したんじゃないの？魔石になつてないし。」

褐色肌の少女の言葉を聞いて全員がデビル大蛇の方を見る。

「確かに魔石にならないし、どうなつてんのよ、コレ？」

そう言つているのは女戦士アマゾンネスの長い黒髪の少女、どことなくもう一人の少女と似ている

為姉妹だと憶測を立てる。

「ああ、それはノッキングしたからですね。あと、デビル大蛇はモンスターじゃなくて食材ですよ。」

『!？』

「あれ、どうかしたんですか皆さん？」

僕の言葉を聞いて目を見開かせて僕の方を見て来る。

「すまない、君はアレの正体を知っているのかい？」

フィンと呼ばれる少年が全員の代表としてボクに質問を投げかけて来るのに対して僕はこう答える。

「はい、こいつは結構高値で取引されているんですよ。高級食材として。」

「それは裏でという事かい？」

「いえ、普通に表ですけど。」

フィンと呼ばれる少年の言っている意味が分からずに答えていると、ビキリと音を立てて空間に罅が出来た。

「総員、戦闘態勢!!」

フィンと呼ばれる少年の指示に全員が従い、戦闘態勢を取る。

僕も何が現れても良いように臨戦態勢に入る。

罅は次第に大きく広がっていき、大型猛獣なら軽く通れるくらいの大穴が出来上がり、現れたのはヘビークリフの大群だった。

ヘビークリフ 哺乳獣類で捕獲レベル30の猛獣。

ざっと見積もって50頭は居る、ここは威嚇であの大穴に逃げ帰らすか。

そうやって考えを巡らせていると、「ロキ・ファミア」がヘビークリフに攻撃を仕掛けていている。

「なっ!？」

僕が驚いている間に「ロキ・ファミリア」とヘビークリフの戦いは激化する。

だが、まともに戦えているのはベートと呼ばれる狼^{ウエアフルフ}人の青年、金髪金目の少女、豪快に笑っていた鉋^{ドワッフ}人の老兵、女戦士^{アマゾネス}の姉妹、フィンと呼ばれる小人^{バルツム}族だけだった。

いや、後衛では翡翠髪の妖精^{エルフ}の女性が魔法を使用するための詠唱を始めていた。

他の人達も何とか応戦しようとしているが、ヘビークリフはそれじゃあ止まらない。

何故なら、ヘビークリフは筋肉を硬質化することが出来、その特質を持つて攻撃や防御を行う為、肉弾戦では手強い相手だ。

だから、僕は威嚇する事にした。

殺気を含むそのオーラを漲らせ、ヘビークリフにへと浴びせるとさつきまで暴れていた様子とは打って変わって大人しくなった。

「大人しく巢に戻れ、死にたくなかったらな。」

そう言った瞬間、ヘビークリフ達は自分達が現れた亀裂へとわれ先にへと飛び込んでいき、最後の一匹が入ると罅は一瞬で修復されて何事も無かったように消え去った。

大広間に静寂が訪れる。

そして、その静寂を破ったのはフィンと呼ばれる少年だった。

「君は本当に何者なんだい、あの蛇の事を知っていたり、さつきのモンスターを威嚇だけ

で帰らせたりする君は？」

その問いに僕はこう答える。

「僕はベル・クラネル、新興派閥ファミリア「ヘステイア・ファミリア」の唯一の団員です。」

こうして、僕は「ロキ・ファミリア」と邂逅を果たしたのだった。

事実

自己紹介をすると、フィンと呼ばれる少年はこう言ってくる。

「新興派閥？^{ファミリア}しかも、団員は君だけなのかい？」

「はい、そうですよ。」

その問いに答えると、ベートと呼ばれる^{ウエアウルフ}狼の青年がこう言ってくる。

「ふざけてんじゃねえぞ、この兎野郎!!俺らが苦戦するする奴をテメエが無傷で仕留める時点でlevelな訳がねえだろ!!大法螺吹いてんじゃねえぞ!!」

そう言ってくるベートと呼ばれる^{ウエアウルフ}狼の青年の言葉に他の「ロキ・ファミリア」の人達も同意見のようだ。

それに対して、僕はこう言うのだった。

「本当の話ですよ、どうしても信じられないなら僕の専属アドバイザーに聞いてくれないませんかよ。」

僕がそう言うと、翡翠髪の^{エルフ}妖精の女性がこう言ってくる。

「なら、お前のアドバイザーの名前を教えてください。」

「エイナ・チュールさんです。」

「そうか、後で確認するでしょう。」
妖精^{エルフ}の女性はそう言つて引き下がってくれた。

?

すると、突然グウ~~~~ツツという僕の腹の虫がなり、なんとなく微妙な空気が流れるのだった。

「すみません、ここに来るまで何も食べていなかったものですからこれで僕は失礼しますね。」

「ちよつと待った。」

そう言つてデビル大蛇を担いで立ち去ろうとすると、フィンと呼ばれる少年に呼び止められてしまう。

「君は一体どこにいくつもりなんだい

？」

「えつ、デビル大蛇を早く食べたいんで地上に戻ると思っているんですけど・・・？」

そんな問いかけに答えると、フィンと呼ばれる少年はこう言ってくる。

「いやいや、それだけ余計な混乱を引き起こしてしまう。」

「えつ、どうしてですか!？」

その言葉を聞いて僕は驚愕の声を上げる。

「何故なら、そのデビル大蛇というのは君からすればありふれたものであるかもしれないが、僕達もといオラリオ住む人々にとつては『未知』そのものだ。」

「なるほど。じゃあ、ダンジョンで食べちゃいますね」

「いや、そう言う事ではないんだけどね・・・」

「それなら、僕を監視するという面目で休息を取るといふのはどうですか？」
『!!』

僕の提案に「ロキ・ファミア」全員が驚愕の表情を浮かべる。

「それじゃ、僕は先に行つて用意しておきますね」

その言葉と共に僕はデビル大蛇の肉を持って十八階層にへと降りて行つた。

「フィン、どうする？」

「うーん、彼の案に乗らせて貰おうかな」

こうして、監視という建前で休息を挟む事にした「ロキ・ファミア」は僕と十八階層にへと降りて行くのだった。

十八階層に着くと、僕は早速デビル大蛇を調理する為に手刀で周囲に生えている木々

を伐採し葉の付いた枝を切り落として行く。

「ねえ、あの子手刀で木とか枝とか切ってるように見えるのあたしだけかな？」

「アンタだけじゃないわよ、私にもそう見えるから」

「うん、切ってるよ」

「つていうか、なんで手刀で切れるんですか!？」

周囲から色んな声が聞こえて来るけど、今はデビル大蛇の事に集中したいので無視する事にした。

そうして手入れをした丸太に火を付け、いよいよデビル大蛇を切り分ける。

「よつと!!」

ズババババツと五等分して焼き始める。

ジユワ~~~~~ツツという肉の焼ける音を聞きながら僕は火加減や焼き面を調整しながらも焼けて行く肉の香ばしい臭いを堪能する。

すると、さっきのアマゾネスの髪の毛の短い妹が話しかけて来る。

「ねえねえ、そのお肉ちよつとだけ食べさせて」

「良いですよ、皆で食べた方が楽しいですし」

「いいの、やったあー!!」

話しかけて来た妹は涎を我慢しながら聞いて来るので了承すると子供のよう

でいた。

「ちよつとテイオナアンタ何言つてんのよ!!」

「えー、だつてお腹すいたんだもん」

「だからつて、あんなのが美味しいわけないでしょ!!」

「でもさあ」

「でもじゃない!!」

姉妹喧嘩が始まりそうな雰囲気になった頃、丁度デビル大蛇の肉が焼きあがった。

「デビル大蛇が焼けましたよ、えーと…」

「あつ、そう言えば自己紹介がまだだったね。あたし、テイオナ・ヒリュテ!!」

「私はこの馬鹿の姉でテイオネ・ヒリュテよ」

「テイオナさんにテイオネさんですね、さつきも名乗りましたけどベル・クラネルです」

「ベルだね、よろしくね」

「別にさんなんて付けなくていいわよ、それに敬語もね」

「分かった。はい、テイオナデビル大蛇の肉が焼けたよ」

「わーい、ありがとうベル!!」

僕がテイオナに焼けたデビル大蛇の肉を渡し、自分の分を食べ始める。

「いただきます!!むぐつ、むぐつ、やっぱりデビル大蛇の肉は美味しいな」

「ホントだ、美味しいー!!」

そう言いながら僕とティオナは食べ進めて行くと、フィンが話しかけて来る。

「ベル・クラネル、そのデビル大蛇というへビは君の住んでいた地域ほしよで食べられていたのかい?」

「はい、そうですよ。デビル大蛇は僕の住んでいた世界ほしよで高級食材でしたから」

「高級食材…、ちなみに幾らくらいするんだい?」

「えっと、確かkgで150万ヴァリスですかね」

『えっ!?!』

何故か、デビル大蛇の価格を聞いて「ロキ・ファミリア」の人達全員が驚愕の表情を浮かべ、ティオネが顔を青くさせている。

「あれ、どうしたんですか?」

「このへビ、そんなに高いの?」

僕が疑問符を浮かべているとティオネが問いかけて来る。

「うん、デビル大蛇は捕獲レベル21あるからそれに合わせて価格も高いんだよ」

「捕獲レベル? 21? どういう事?」

僕の説明に疑問符を浮かべるティオナに更に言葉が続ける。

「捕獲レベルって言うのは獲物をしとめる難度を示すレベルなんだ。捕獲レベルが高い

猛獣ほど個体戦闘力は高くなるが、棲息環境や希少性なども考慮されるため本体は弱くても捕獲レベルが高くなるケースもあるんだ」

『……………っ!?!』

「そ、それなら、このデビル大蛇の捕獲レベル21ってどれぐらいなんスか?」

そう聞いて来るのはザ・平凡と言っても過言では無い青年だった。

「このデビル大蛇は弱いですよ、だって原種オリジナルの捕獲レベルは5100ですから」

『!?!』

青年の問いに答えると「ロキ・ファミリア」の人達全員が絶句する。

まあ、自分達が苦戦していた相手が弱い部類に入ると聞かされたんだからそうもなっちゃうか…。

そして、目の前で見せられた何もさせずに倒して見せた圧倒的強者の姿も相まっつね。

そんな事を考えていると、さっきの金髪金眼の少女が話しかけて来る。

「どうすれば君みたいに強くなれるの…?」

そう聞いて来る少女の眼には強さを求める意思がビシビシと感じ取れた。

それは他の「ロキ・ファミリア」の人達も同じだった。

なるほど、これが最強派閥と呼ばれる所以かなと僕はそう思った。

「強い肉体を作るには鍛える事は大事だけどその肉体の土台を用意するには『食』が大事になって来る。だから、今は悔しさを嘔み締め昨日よりも強くなる為に食べると良い」

そう言いながら少女の前にデビル大蛇の肉を差し出すと、少女は食べ始める。

少女が食べ始めると、他の人達もがつつくようにデビル大蛇の肉を頬張っていく。

僕はその姿を微笑ましく見ているのだった（ちゃんと自分の取り分を確保しながら）。

帰還

十八階層での休息という名のデビル大蛇の食事は肉の一片たりとも残る事無く完食した僕達は地上にへと向かっていった。

「本当に良かったのかい、僕達もデビル大蛇を食べてしまっても？」

「はい、一人で食べるよりみんなで食べた方が美味しいですから」

僕は「ロキ・ファミリア」の団長であるフィン・デイルムナさんとそう話しながら進んでいく。

そして、僕は「ロキ・ファミリア」の人達から質問攻めをされるのだった。

「ねえねえベル、デビル大蛇の後に出てきたあのモンスターは捕獲レベル幾つ位なの？」

「ああ、ヘビークリフの事？あの猛獣の捕獲レベルは30くらいだったかな」

「デビル大蛇より上なの!？」

「うん、まあ群れで行動している猛獣だしそれも加味してると思うけどね…。普通の美食屋なら避けるべき猛獣だからね」

突然の質問に僕は答えると、テイオナは驚きの表情を浮かべる。

「あの、美食屋って何？」

「美食屋って言うのは未開の味を求めてまだ見ぬ食材を自ら探し、捕食する食の探究者である。ここらへんは冒険者と似ているかな。」

「そうなんだ」

次に質問してきたのは金髪金目の少女アイズ・ヴァレンシユタイが話しかけて来て僕はそれに答えて納得する。

「でも、美食屋の中には料理人と二人組コンビになっている人もいるしね」

「それは何故だ？」

「美食屋が冒険者なら料理人は鍛冶師や魔道具アイテム・メーカー作製師とかかな」

「なるほど、美食屋が食材調達し料理人がその食材を調理するということか」

「そうです」

僕の言葉に食いついたのは翡翠髪の王族妖精ハイエルフであるリヴェリア・リヨス・アールヴさん、

「ロキ・ファミリア」の副団長だそうです。

「ベルよ、お主の世界に美味しい酒はあるか？」

「ありますよ、バツカス島に生息している酒乱牛やバツカスドラゴンが一押しですね。」

酒乱島に一本500万ヴァリスのエメラルドワインがありますし」

「お、おお、凄まじいのう…」

『〔主に金額が…!!〕』

「まあ、僕の場合グルメ界にあるドツハムの湧き酒が一番ですけど」

「ほう、その酒はそんなにも美味しいのか？」

「ええ、僕の師匠の一人が人生のフルコースに入れているくらいですから」

酒の事を聞いてきたのは酒好きの鉦人^{ドワーフ}の老兵ガレス・ランドロックさん、「ロキ・ファミリア」の最古参の幹部だそうだ。

「人生のフルコース？なにそれ？」

「人生のフルコースっていうのは未開の味を探し求める美食屋が人生の目標とするメニューでオードブル（前菜）、スープ、魚料理、肉料理、メインディッシュ（主菜）、サラダ、デザート、ドリンクの8つからなっているんだけど個人の嗜好やこだわりが反映されている場合も多く、必ずしもフルコースの捕獲レベルの高さと実力は比例しないから。」

美食屋だけでなく、料理人や再生屋、研ぎ師などもフルコースを持っている場合があり、特に料理人の場合は自分もしくはコンビが調達した食材を調理したメニューとなっているからね」

「なるほどってまた気になる単語が出てきたわね」

ガレスさんの次に質問してきたのはティオネで人生のフルコースについて聞いてきたため、答えると納得をしてもらえた。

「じゃあさじやあさ、ベルの人生のフルコースってどんなの!?」「ちよつと馬鹿ティオナ

!!

疑問を解決させようとしたティオネを押しつけてティオナが僕の人生のフルコースについて聞いて来る。

「うん、僕の人生のフルコースはまだ八つとも空欄だよ」

「えっ、何で!?!」

「だって、世界にはまだまだ僕の知らない食材があるんだからそんなすぐに決めなくてもいいかなって思っているから」

「ほう、確かにこの世はまだ知らぬ『未知』に溢れておるからのう。お主の考え方は間違っておらんじやろうな」

ティオナの質問に答えると驚かれてしまうがその考えを伝えるとガレスさんが代弁してくれた。

「じゃあさ、人生のフルコース完成したら御馳走してよ!!」

「ちよつと待ちなさい馬鹿ティオナ!!それだとお金が幾らあつても足りないわよ!!」

「えー、でも食べてみたいじゃん!!」

「あははっ、別にタダでいいよ。美味しく食べてくれるならお金なんていらぬし」

「ベルあんた絶対いつか詐欺に遭うわよ…」

僕の言葉にティオネは呆れながらそう言ってくる。

「絶対だからね！約束!!」

「うん、約束!!」

「えへへ：／／!!」

ティオナの念を押して来るのに対して僕もそれを守る事を言うのとティオナは笑っていた。

すると、ずっと黙っていたベートが話しかけて来る。

「オイ、テメエの世界で一番強え猛獣^{ヤツ}つてのはなんだ？」

「ちよつと、ベート空気読みなさいよ」

「ホントだよ、あの強がり狼は」

「黙ってる、馬鹿ゾネス共!!」

「ああん!!」「なんだとー!!」

ベートの質問に対しティオネ・ティオナが噛み付き、ベートが罵倒し一触即発の空気が漂う。

「やめんか、お前等」「止めんじやねえ、糞爺!!」

「そうだぞ、みつともない」「えくだつてさゝ…」

「ティオネ、落ち着こうか」「はい、落ち着きました団長!!」

フィンさん達に止められて三者三様の返答をするのを見て僕は近くにいた平凡な青

年代表格のラウルにこう言った。

「楽しい所だね【ロキ・ファミリア】」

「そうっすね、自分はこの派閥ファミリアに入って良かったと思ってるっす」

「そっか」

僕とラウルがそんな事を話していると、アイズが話しかけて来る。

「私も聞きたい、貴方のいた世界に存在する最強の生物を…」

その言葉と共に向けられた眼には何か黒い物を感じ取れた、まるで己すら焼き殺すほどの黒い炎を…。

「それならあそこで口論している人達も聞きたいだろうしね。それじゃあ、説明始めるよー!!」

『!!』

僕の言葉を聞いてさっきまで口論していたのが嘘のように静まり返った。

「僕のいた世界で最強と言わしめる猛獣は八体の猛獣、総じて『八王』とよばれる存在だ」

「八王…」

「それぞれの祖先は時代こそ違えどいずれも地上を支配し、最強と謳われた伝説の猛獣達で今もなおその子孫は最強の遺伝子を受け継いで各大陸を支配しており、複雑に入り組んだグルメ界の生態系バランスは八王によって保たれているんだ」

「数千年前の足跡に近づいただけでも圧倒的な存在感に体が萎縮してしまうほどで、八王の足跡上には八王の種類やその時の機嫌によって、花畑や美しい湖、一木一草生えないう荒野などが発生するなど、まさに環境そのもののような存在だ。彼らが本気で攻撃態勢に入ってしまうと、対象が原型を留めていられる時間は100分の1秒もなく、ほぼ攻撃と同時に死ぬ。また、小動物のような敏感さを併せ持つておりわずかな地殻変動や気候の変化から将来の危機を察知し太古より幾度と無く繰り返してきた生物大量絶滅の危機を乗り越えてきた。地球ほしの危機に関しては最善とあらば一切の躊躇なく自らの命を犠牲にした方法も取るんだ。それと八王は種族全体が八王に分類されるのではなく、種族の中でも特別な個体が八王と呼ばれているんだ」

「…テメエとその八王が闘りあつたらどっちが勝つ」

「当然、八王だけどタダでヤラレルつもりは無いけどね…」

ベートの問いに対し僕はそう答える。

「八王、そんなヤバい奴等が居るのね…」

「うん、それならもつと強くないとね!!」

「やってやる…!!」

「強くなる!!」

八王の話の聞いても自分を奮い立たせている〔ロキ・ファミリア〕。

僕もこんな派閥ファミリアを作りたいと思った。

そうして、話している内にダンジョンと地上を繋ぐ入口が見えて来た。

「それじゃあ、僕はここで失礼しますね」

「ああ、とても興味深い話が聞けたよ。ありがとう、ベル・クラネル」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

こうして、僕の初めてのダンジョン探索は終わりを迎えたのだった。

後の祭り

地上に戻って僕はまず最初にギルドに行き、手に入れた魔石を換金する。

「ふう、これっぽっちだけだと全然食費が足りないや」

そう言いながら手には1200ヴアリスが握られていて、完全なる金銭不足であることを示している。

「しょうがないな、もう一回ダンジョンに潜ろう!!」

そう決めて僕は足をダンジョンに向けて歩き出そうとした時、エイナさんが話しかけて来る。

「あつ、ベル君今ダンジョンの帰り?」

「いえ、もう一回くらい潜ろうかなと思ひまして…」

「そっか、でもその前にどこまで潜って来たか聞かせてくれるかな?」

「はい、構いませんよ」

そうして、僕はエイナさんに事の経緯を話した。

「ちよつと待ってベル君、別世界? デビル大蛇? なにそれ!」

僕の説明を受けて混乱しているエイナさんに魔法の言葉を言った。

「後の事はリヴェリアさんに聞いて下さい」
他力まるなげ本願である。

「リヴェリア様？なんでリヴェリア様なの？」

その事に疑問を投げかけて来るエイナさんに僕はこう言った。

「ああ、『ロキ・ファミリア』の皆さんはその状況にいたから事情は理解してくれているので大丈夫ですよ」

「もう、頭の処理が追いつかないい…」

頭を抱えながらそう言っているエイナさんに僕はこう言った。

「エイナさん、頑張ってください」

「ベル君、人事みたいに言ってるけど君自身の事だからね!？」

僕の言葉にエイナさんはツツコミを入れて来る。

「それじゃあ、僕はもう一度ダンジョンに行つて魔石を集めてきますね」

「えっ、あつ、ちよつと、ベル君…!!」

僕はそう言つてエイナさんの制止を無視してダンジョンにへと赴くのだった。

【ロキ・ファミリア】 黄昏の館

「つまり、別世界の…その…デビル大蛇とヘビークリフとかちゆうモンスターにフィンは手こずったちゆう事か…」

そう話すのは【ロキ・ファミリア】主神のロキ。

「ああ、正直に言えばベル・クラネルが来てくれなかったら何人かは死んでいただろうね。後、ロキデビル大蛇はモンスターじゃなくて猛獣だからね」

「いや、そないなやつ神の力封じられとる神々ウチらからすれば十分モンスターやからな…。にしてもや、なんでまたそないな奴がこつちに来たんやろうな？」

「分からんが、恐らく…」

「あの男が関わっていることには変わりあるまいて。しかし…」

「そうだね、でも…」

「でも…？」

「あのデビル大蛇の肉は美味かったのう」

「確かに」

「自分らも食ったんかいな!? それでそんなに美味しいんか、そのデビル大蛇って」

「ああ、今まで食べた中では一番じゃな」

「そんな話聞いて取ったらウチも食べたなって来たわ、それでウチの分は？」

「すまん、全て食べ切ってしもうたわ」

「そんな殺生な〜〜〜!!」

「デビル大蛇の肉を絶賛する話を聞いても食べれないと分かり後の祭り」と嘆くロキなのだった。

予測

エイナさんから逃げた僕はダンジョンに潜り、魔石と怪物素材ドロップアイテムを集めている。

「ヴオオオオオオオオオツ!!」

「フツ!!」

自然武器ナイチャーウエボンの石斧を振り下ろしてくるミノタウロスの横つ面を蹴り飛ばし、魔石に変えて回収する。

「やっぱりこれだけじゃ足りないよね・・・」

そういいながらさつきまで集めていた魔石と怪物素材ドロップアイテムを見て声を漏らす。

そう、10個もの大きな麻袋の中にギチギチに詰め込まれている魔石と怪物素材ドロップアイテムを換金したとしても僕の一日の食費すら賄う事は出来ない。

「よし、これを一旦換金してからもう一回集めにこよう。今度は麻袋二十袋用意しよう」
 そう言いながら僕は換金のためにギルドに向かうのだった。

換金を終えると、総額1690万ヴアリスを手に入れた僕だがやっぱり足りない。

「よし、もう一回行こう」

そう決めた僕だが、大金を持ってダンジョンに行く気にはなれず一度本拠ホームに戻ることに

にした。

地上に戻つてくると日が完全に暮れていて夜になっていたため今日の所はこれくらいにしておくことにした。

「ただいま戻りました」

そう言つて本拠^{ホーム}である隠し部屋に入るとヘスティア様がバイトから帰つてきていた。

「おかえりベル君、初めてのダンジョンはどうだったい？」

「そうですね、モンスターは動きや対応が単調で狩りやすいです」

「そうか、それはよかったね」

僕の言葉にヘスティア様はそう言い机の方を指差しながらこう言つてくる。

「今日はバイトでまかないを貰ってきたんだ、一緒に食べよう!!」

「はい、ヘスティア様」

そうして、晚餐はものの数分で終わった。

「いや、早い、早すぎるよベル君!!そんなに急いで食べちや喉詰まらせるよ!!」

「いえ、このくらいは僕の中では遅いくらいなんですけど・・・」

「そ、そうなのかい・・・。まあ、君が満足してくれたなら・・・」

ぐううううううううううううううう・・・。

ヘスティア様がそう言いながら大きな腹の虫がなる。

「やっぱりこれっぽちじゃ小腹も満たされせんね」

「なん・・・だと・・・」

ヘスティアは戦慄した、この兎のような相貌からは想像だにできないほどの大食漢である自分の眷族に。

「そういえばスキルのことで気になっているところがあつたんですよ」

そう、僕ののスキルの一つ【美食世界を行き交う者】のことだ。

効果内容が美食世界に自由に行けると記されていることから前にいた世界に行くことが出来るのではないかと考えた。

「なるほどね、それでその美食世界に行けたとして何をするんだい？」

「決まってるじゃないですか、食材を捕獲してくるんです。それにもしこれが解釈がこれで合っているんだったら食費はタダも同然ですから」

「最高じゃないか、ベル君!!」

こうして、僕のスキルによる実験が始まるのだった。

実験

僕とヘステイア様はさっそく本拠ホームの外で実験をすることにした。

「さあ、ベル君どーんとやっつけてくれ!!」

「はい、ヘステイア様」

食費の心配をしなくて済むかもしれないことから

ヘステイア様の期待値は天井知らずだ。

僕は【美食ス世界キを行キき交ルう者】に意識を向け手を前に出すと目の前にダンジョンでヘビークリフが現れた亀裂と同様の亀裂が現れた。

「それじゃあ行ってきますね、ヘステイア様」

「うん、気をつけてくれよベル君」

「はい、出来る限り」

ヘステイア様の言葉にそう言った後、僕はグルメ界へと向かうのだった。

亀裂の中に入ると、出た先は森の中だった。

「うーん、ここは確か・・・」

「グアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「ふっ!」

声を上げて上空から襲いかかってきたのはフライアダック、捕獲レベル15の食材だ。

「まずはこいつから捕獲しよう」

そう言つて捕獲に取りかかる僕は地面を蹴りフライアダックの懐に潜り込み拳を叩き込む。

「ノッキング」

ノッキングとは運動を司る神経組織を刺激し一時的な麻痺状態にする技。

そのノッキングを受けたフライアダックは身動きをとれなくなっている。

「よし、捕獲完了」

フライアダックを皮切りに僕は次々に食材を捕獲していく。

「ふう、一先ずは今晚の食材はこれくらいで良いかな」

そう言いながら山のように積み上がった食材を見る僕はヘステイア様の元に帰るた

めに亀裂を作り出す。

「ただいま帰りました、ヘステイア様」

「お帰りベル君、それで美食世界どうだったんだい？」

「はい、これだけの食材を捕獲できましたよ」

「いや、多すぎるよ!!これじゃあ本拠ホームの保管庫にも入りきらないよ!!」

ヘステイア様は山のように積み上がった食材を見ながらそう言ってくる。

「大丈夫ですよ、これ僕の今晚の夕食になる分なので」

「えっ」

ボクの言葉を聞いた瞬間、ヘステイア様は放心状態になっていた。

「それじゃあ食べましょうヘステイア様」

「うん」

「いただきます」

そう言つて二回目の夕食を始めるのだった。

「う〜くん!!このフライアダックという肉つて美味しいね!!しかも、骨も食べられるなんて最高だね!!」

「そうですね、まだまだあるからたくさん食べて下さいね」

「うん!!」

ヘスティア様は満面の笑みでそう言いながら食事の手を進めていくのだった。

そうして、食事を終えると山のようにあつた食材は綺麗さっぱり僕の腹に収まった。

「ごちそうさまでした」

手を合わせて食事の終わりの挨拶をして片付けを始める。

「いやー、美食世界の食材がこんなにも美味しいなんて最高だよ」

「それは良かったです」

そう話しながら食器を片付けて僕達は眠りにつくのだった。

その日の翌日、僕は朝食の為に美食世界に来ていた。

「さて、朝はしっかりと食べないとな」

そう言いながら食材を探しているとホワイトアップルの木を発見した。

「デザートはこれにしよう、次はメインだな」

そう言つて僕は食材を探していると眼の前に蟹豚が現れた。

「うん、決定」

そう言つた瞬間、僕は蟹豚を捕獲する。

「これじゃ物足りないからもう少しなにか捕まえていきたいな」

そう言いながら探しているとチーズラビットが横切るのが見えたのでそれも捕獲してから戻る。

戻ってきたらさっそく解体し調理を始める。

まずチーズラビットと蟹豚を部位ごとにカットしていく。

次にチーズラビットの肉に塩・胡椒をふりかけ小麦粉・卵・パン粉の順にまぶして油で揚げて行く。

その間にパンを横半分に切つて間にレタス・トマト・みじん切りした玉ねぎ・タルタルソースがぎっしり詰まった実タルタルツの身のタルタルソース・チーズラビットのカツを挟んでチーズラビットのカツサンド完成。

次に蟹豚はソースの部分を薄くスライスしてチーズ白菜と交互に重ね合わせていき蒸す。

蒸し上がったら柑橘類のさわやかな果汁が溶け込んだポンカン・ポン酢カンの果汁をかけて完成。

デザートのホワイトアップルのアップルパイも焼き上がって朝食の完成!!

ドリンクに搾りたてホワイトアップルジュースも作った。

「ヘステイア様起きて下さい」

「あと五分〜」

「じゃあ朝食いららないんですね」

「食べる!!」

朝食抜きに反応して飛び起きるヘステイア様を見て子供みたいだなと思ってしまうた。

「いや〜、こんなに豪華な朝ご飯が食べれるなんて想いもしなかったよ」

そう言いながらかつサンドにかぶりつくヘステイア様。

「そう言ってもらえるなんて光栄です」

そう言いながらヘステイア様の盃コップにジュースを注ぐ。

「それで君のスキルについてなにか解ったことはあるかい？」

「そうですね、とりあえず解ったことは向こうのグルメ食材をこっちの世界に持つてこれることですかね」

「そうだね、そのおかげでごちそうにありつけてるわけだし」

「そこは何より助かってます」

こうして、朝の穏やかな時間は過ぎていった。

そして、今日も稼ごうとダンジョンに向かっていると・・・。

「テメエは・・・ベル・クラネルだったか」

「はい、ベート・ローガさんですよね」

先日食事を共にした「ロキ・ファミア」のベート・ローガさんと出会った。